

留学体験記

工学部 建築・デザイン学科 3年

網谷 光雛

留学先：ペルー、カトリカ大学（私立）

留学期間：2018年8月~2019年7月

私はペルー留学に向け以下3つの目的を持ち臨みました。1つ目は自国・他国への理解を深める事、2つ目は外国語を修得する事、3つ目は教養を高める事です。卒業に関わる科目を優先して履修していたため、留学前は独学でのスペイン語学習となりました。現地でも自分に合う適当な講座がなかったために、語学教育を受ける機会はありませんでした。それでも履修した科目全てにおいて単位を習得し、留学期間を充実させられた要因は、挑戦と努力、そして周りの支えがあったからだと強く感じます。この1年間で学んだ事は数えきれませんが、その中でも特に4つの事を取り上げて紹介したいと思います。

1つ目は「語学力以外の大切さ」です。私は当初スペイン語力がほぼゼロでしたが、それでも仲良くしてくれた大切な友人がいます。勉強を教え合ったり、一緒に食事や旅行をしたりしました。私が話す片言なスペイン語を理解してくれ、私が理解できない時はゆっくりと簡単な単語を使って何度も繰り返し話してくれました。



語学の壁を越えて仲良くなった友人と私

共通の言語はなかったけれども身振り手振り、そしてそれを推測する勘、何よりも彼女の強い優しさがあったからこそ私たちは友人になれたのだと思います。私はその思いやりに対して失礼がないよう、常に心掛けていた事があります。些細な事ではありますが「食事で好き嫌いせず残さず食べる事」、これもそのうちの1つでした。これらは何も彼女との関わりに限った事ではありません。もちろん、会話を豊かにするのは語学力や教養である事は間違いありませんが、意思疎通をしたり親しくなったりする時、語学力より大切な事がたくさんあると実感しました。

2つ目は「現地コミュニティに入る大切さ」です。せっかくペルーにいるにも関わらず、大学生活だけで終わってしまっただけではもったいない。そう思った私は約1年間、合気道教室へ通い、ラ・ウニオン校（日系人が多く通う小中一貫校）では日本語・日本文化教育ボランティアをしました。日本人であったためなのか、日本と繋がりのある彼らは、スペイン語を話せない私でも歓迎してくれました。結果として語学の訓練になっただけでなく、今まであまり知らなかった日系社会について学ぶ機会も得られました。日本で移民政策があ

った頃、南米へ多くの日本人が移住し、今では現地に日系社会が存在します。特にペルーは今年移民 120 周年を迎え、皇族の眞子様が 7 月に訪問された事も含め、日本政財界から多くの方が現地での祝賀式典等に参加されています。遠く離れたペルーですが、そこにも確かに「日本」はありました。特に印象的な事は合気道教室での先生方の言葉です。「遅れてはいけません。遅刻は失礼な事である。」日本人にとっては普通の価値観ですが、時間に寛容な南米で、日系人ではない彼らから発せられたこの言葉は、衝撃と感動で忘れられません。それだけではなく、ラ・ウニオン校では日本の伝統行事に合わせて、書道や折り紙などの日本文化を伝える取り組みがあります。地球の裏と言われるペルーにも、日本人が伝えた「文化」や「精神」が今もなお受け継がれているのです。現地コミュニティで彼らと関わった 1 年間の経験から、日本文化の価値を学んだと同時に、日本人である私も改めて大切にしていこうと思いました。

3 つ目は「ホームステイの良さ」です。滞在して 3 か月が経った時、私は日系人家庭でホームステイ生活を始めました。大学で授業がある日にはお弁当を用意してくれ、体調不良の時には看病をしてくれ、日帰り旅行へ誘ってくれ、ペルー料理の作り方を教えてくれました。完成した課題のデータを締め切り前日に誤って削除し焦り落ち込んでいた時、日系人のホストマザーは日本の冷静さと南米の陽気さで励ましてくれました。私を本当の家族のように扱ってくれ、この家族に出会えたからこそ留学を無事に終えられたと確信しています。また同じ家には JICA ボランティアの方も滞在していました。日々の活動についてお話を伺うだけでなく、その方を通して世界で活躍する日本人の方々と接する機会を得られた事は、自分にとって刺激あるものでした。ホームステイは共同生活です。自分勝手な行動をしていけば相手だけではなくお互いに不快な思いをしてしまいます。ホームステイにはある程度の運や相性、多少の我慢は必要だと思いますが、我慢した以上に素晴らしい体験となるでしょう。この生活を通して私は日系とペルーの文化をより知る事ができました。もちろんスペイン語でのコミュニケーション能力も高まり、今改めて、この家でのホームステイを選択した事は間違っていなかったと思います。



ホストファミリーとの日帰り旅行

4 つ目は「自分を適応させる事の大切さ」です。履修した授業は全て現地の学生向けであり、海外留学生は自分一人だけで、周囲は皆ペルー人学生という授業も多々ありました。そのおかげで、スペイン語はネイティブの語彙とスピードに常日頃触れる事ができました。またペルー人と関わる機会も多く、良くも悪くも様々な経験ができました。特に忘れられ

ないのはグループワークです。時間に寛容な南米人は 1 時間の遅刻が当たり前。自分を除き、誰一人集まって来ない最悪な日もありました。遅れてくるのは分かっている、遅れたら失礼だという気持ちが先行し、待ち続けてはストレスが溜まりました。「遅れないのは偉いけれど、遅刻したら失礼だというのは日本の文化。でもここはペルーだから。」という言葉で私も少しは寛容になれ、それ以降は文化の違いでそれほど苦しまなくなりました。異文化での生活において、ただどんな文化であるのかを理解するのではなく、そこでその文化に自分自身を適応させる事こそが重要なのではないかと感じました。カトリカ大学には中南米、欧米など世界各地から留学生が集まります。ペルーにいながらもペルー以外の人たちと関わる事は十分可能で、そういった人たちとの交流は異文化理解を深めるのに役立つと思います。また授業の実習で訪れたオクサパンパという地域では、移民したドイツ人の子孫が今なおドイツ語やドイツ文化を大切にしていました。同じ国の中でも異なった民族背景・価値観を持つ人たちが共存するペルーでの学びは、自分の視野を広げてくれたに違いありません。

先進国の日本とは違って決して便利で豊かな暮らしとは言えないけれども、そこでの生活は自分にとってかけがえのないものでした。海外旅行や研修では得られなかったものをたくさん味わう事ができました。14 時間もの時差、多様な民族や自然環境、見た事のない果物や野菜。ニュースでしか知らなかった貧困・移民問題を目の当たりにして、現実



ペルーへ興味を持ったきっかけのマチュピチュ

に心が痛むと共に自分がいかに恵まれていたか気付かされた瞬間もありました。時間に寛容なために書類を中々受理・発行されなかった事、チーナと呼ばれ不遇な対応をされた事もありました。チーナは「中国人」だけでなく「アジア人」もさし、見下す意味も含めます。しかし、そういった辛い事も含めて 1 年とは思えないほど多くの貴重な経験をする事ができ、改めてペルーへ留学してよかったと思います。言語・食生活・治安の違いから抱いた「何ヶ月も生活していけるのだろうか？」といった渡航前の不安は消え去り、長く滞在したからこそその経験は、自分を「強く」・「豊かに」してくれたと感じます。私は外国語とは単に外国人と話すためのものではなく、新たな学びを得るための道具だと思っています。外国語・国際学専攻の人たちの留学が一般的ですが、それ以外の分野の人でも目的さえあれば、留学する価値は十分にあるのではないのでしょうか。

最後に、留学前からお世話になった DTP (ダブル・トライアングル・プログラム) 関係者の皆様、及び留学を通してお世話になった皆様には心から御礼申し上げます。